

富山県南砺市
在 房 遺 跡 IV

—県営ば場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴う
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(7)—

2006年3月

南砺市教育委員会

富山県南砺市

在 房 遺 跡 IV

2006年3月

南砺市教育委員会



卷頭図版 調査区全景

序

南砺市の中央部に位置する北山田地区は、山田川左岸の河岸段丘上に位置します。県営ほ場整備事業に伴い平成10年度から試掘調査を行った結果、縄文時代から近世までの様々な遺跡を発見し、多くの歴史的遺産が埋蔵されていることが分かりました。遺跡の大半は盛土により現地保存が図られましたが、用排水路用地及び一部の水田削平部分については平成12年度からは本調査を実施し、記録保存を行ってきました。

北山田北部地区では今年度、在房遺跡の調査を株式会社イビソクに委託しました。調査の結果、縄文時代や中世の溝、土坑などの遺構が確認されました。また、当時の生活に用いられた上器や石斧も出土しました。本書は、その調査の成果をまとめたものです。郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

終わりに、この調査の実施にあたり、富山県農林水産部、南砺市シルバー人材センター、ほ場整備事業北山田北部地区委員会をはじめ、地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに、深く感謝を申し上げます。

平成18年2月

南砺市教育委員会

教育長 梧桐角也

例　　言

1. 本書は、県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴う富山県南砺市在房遺跡の発掘調査概要である。
 2. 調査は、富山県農地林務部の委託を受け、南砺市教育委員会の監理のもとに、株式会社イビソクが行った。地元負担金については、南砺市教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。
 3. 調査事務局は、南砺市教育委員会文化課に置き、文化課長 上田一郎が調査統括を、同課文化財係長 林浩明、文化財保護主事 佐藤聖子・片田耶紀が調査事務を担当した。
- 各調査区の調査期間、調査面積、調査担当者は、以下の通りである。

遺跡名	調査区	調査面積	調査期間	調査担当者
在房遺跡	5地区	220m ²	平成17年7月25日～8月11日	岡田有司(株式会社イビソク)
	6地区	280m ²	平成17年7月25日～8月11日	松山繁(株式会社イビソク)
	7地区	1,410m ²	平成17年6月16日～8月25日	松田繁(株式会社イビソク)

4. 本書の執筆は、III-3-(2)を岡田が、IV-1をパレオ・ラボAMS年代測定グループ〔小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根久〕(株式会社パレオ・ラボ)が、IV-2を新山雅弘(株式会社パレオ・ラボ)が担当し、それ以外の執筆および全体の編集は松田が担当した。
5. 本書掲載の写真は、遺構写真を松田・岡田が、遺物写真は寿福写房が撮影した。
6. 本書の遺構番号は、各地区ごとに完結している。
7. 発掘出土品・記録・整理作業に係わる各種資料は、南砺市教育委員会が一括して保管している。
8. 本書に使用した方位は座標軸に合わせたものである。
9. 本書で用いた土色は、小川正忠・竹原秀雄編著(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修)の『新版 標準土色帖』2002年版を基準としている。
10. 調査期間中に、下記の方々から、協力・助言を得た。記して謝意を表する次第である。(敬称略)
太嶋勇・山田政寛・水口吉則・山田一憲・高橋健太郎・金子健一・河合君近
11. 調査参加者は以下通りである。
井口金治・井口外治・井口富士夫・金本幸作・坂下弘・塙本進・中沢昭夫・堀外治・水口良男
溝口日出夫・山田善之・片口麗子・中山政子・橋本澄子・水口浜子・溝口秋子・山田澄乃(発掘作業員)

目 次

序

例 言

目 次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経緯と経過	3
III 調査の概要	6
1. 調査の方法	6
2. 発掘調査日誌抄	6
3. 5地区の概要	7
4. 6地区の概要	9
5. 7地区の概要	11
IV 自然科学分析	14
1. 放射性炭素年代測定	14
2. 遺跡の花粉化石群集	17
Vまとめ	18
1. 遺構	18
2. 遺物	19
3. 小結	19

図 版 目 次

第1図 位質と周辺の遺跡	第7図 6地区樋状遺構平面図・断面図(1/40)
第2図 遺跡範囲と調査区位置図	第8図 7地区遺構平面図(1/200)
第3図 調査区割図	第9図 7地区西壁・東壁土層断面図(1/100)
第4図 历年較正結果	SD01土層断面図(1/100)
第5図 5地区遺構平面図(1/200)	第10図 5・6地区出土遺物(1/3)
南壁土層断面図(1/100)	第11図 7地区出土遺物(1)(1/3)
第6図 6地区遺構平面図(1/200)	第12図 7地区出土遺物(2)(1/3)
南壁土層断面図(1/100)	第13図 7地区出土遺物(3)(1/3)

写真図版目次

巻頭図版	調査区全景	写真図版6	7地区SX01検出状況
写真図版1	5地区調査前風景・5地区完掘状況		7地区遺物出土状況
写真図版2	5地区完掘状況	写真図版7	5地区出土遺物
	SD01・02・04完掘状況	写真図版8	6地区出土遺物
写真図版3	6地区調査前風景・6地区完掘状況	写真図版9	7地区出土遺物(1)
写真図版4	6地区完掘状況・ピット群完掘状況	写真図版10	7地区出土遺物(2)
写真図版5	7地区調査前風景・7地区完掘状況	写真図版11	6・7地区出土遺物

I 位置と環境

南砺市は、富山県の南西端部に位置し、石川県金沢市と県境をなしている。市の西側には、養老3年(719)、泰澄大師によって開山されたとされる靈峰医王山などの山脈が連なっており、その山脈の大門山から流れる小矢部川は、支流とともに散村風景が広がる砺波平野を形成する。旧福光町の市街地は、主に小矢部川沿いに展開されている。

在房遺跡（1）は、山田川と小矢部川に挟まれた標高70m前後の河岸段丘上に立地する。南から北に向けて緩やかに傾斜し、標高67m付近で田尻との境界となる。

在房遺跡周辺の遺跡について概観すると、小矢部川支流の大井川と山田川に挟まれた河岸段丘上に、数多くの遺跡が密集している。

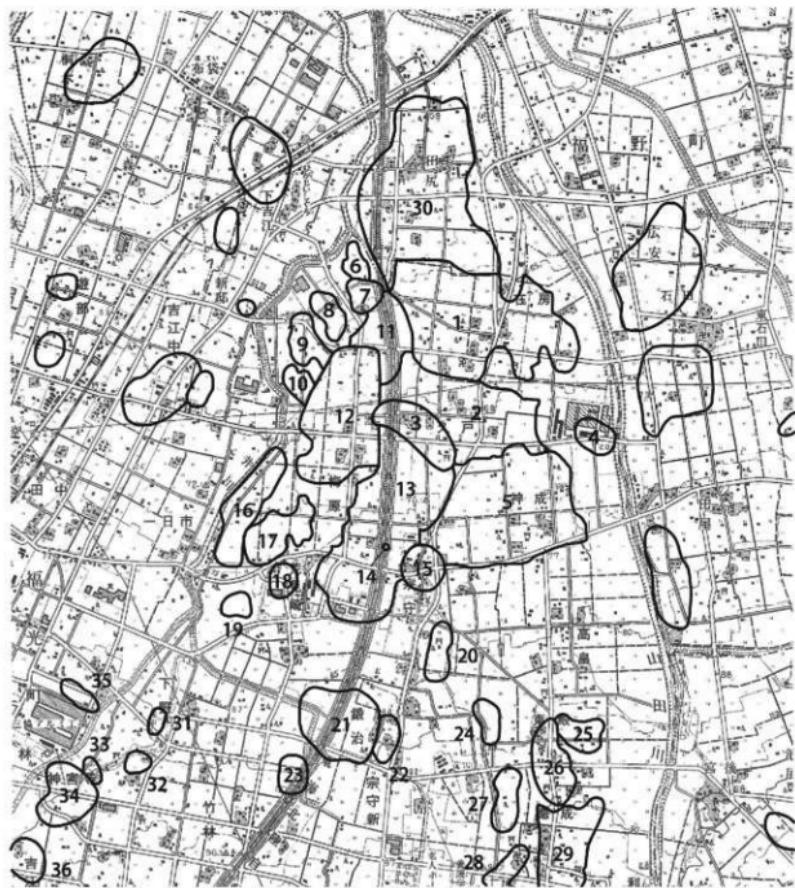
縄文時代の遺跡としては、在房遺跡の南側に位置する宗守遺跡（15）をはじめ、うずら山遺跡（18）、徳成遺跡（28）、東殿遺跡（27）、東殿Ⅲ遺跡（25）、竹林Ⅰ・Ⅱ遺跡（34・32）などが挙げられる。うずら山遺跡では縄文時代草創期の竪穴住居が1棟確認されており、この地域では貴重な事例として報告されている。また、東殿Ⅲ遺跡では、縄文中期中葉の炉跡が合計8基確認されている。

弥生時代については、梅原胡摩堂遺跡（13）、梅原落戸遺跡（12）などがあげられる。梅原胡摩堂遺跡では、弥生時代中期の土器・管玉・石錫が出土しているほか、梅原落戸遺跡でも弥生土器が出土している。

古墳時代については、梅原安丸Ⅲ遺跡（10）で竪穴住居が1棟検出しているほかは、徳成遺跡で土坑が確認されている程度である。

古代、中世及び近世については、東海北陸自動車道建設に先立って行われた数多くの発掘調査によって成果が報告されている。梅原胡摩堂遺跡をはじめ、梅原安丸遺跡群（6～10）、梅原加賀坊遺跡（11）、田尻遺跡（30）、久戸遺跡（3）において、中世から近世にかけての集落跡が確認されている。平成元年度から4年度にかけて（財）富山県文化振興財団が行なった梅原胡摩堂遺跡の調査では、12世紀中頃～19世紀にかけて断続的に集落が営まれていることが確認された。特に中世前期には、自然河川に隣接する形で集落が形成されており、総柱建物97棟、側柱建物28棟が確認されている。平成2年に福光町教育委員会が行った梅原安丸遺跡群の調査でも、12世紀末～15世紀前半にかけて営まれた集落が確認され、総柱建物11棟、溝4条、井戸4ヵ所、土坑10基に及んでいる。そのほかにも、久戸遺跡、徳成遺跡、神成遺跡（5）などで、それぞれ古代、中世の掘立柱建物が数棟検出されている。

在房遺跡では、平成12年度から発掘調査が行われている。平成12年度に山田川左岸で行われた1次調査（1・2地区）では、古墳時代と古代、中世の遺構が検出されている。1地区は、上層で掘立柱建物、井戸、溝、土坑のほかに土器埋納土坑が検出され、下層では竪穴住居や溝、上坑が検出されている。また、2地区では古代の建物群のほかに水路が確認されている。平成13年度に1地区の南側で行われた2次調査（3地区）においても、掘立柱建物、溝などが検出されている。平成14年度に在房地区のほぼ中央で行われた3次調査（4地区）でも、掘立柱建物、溝、土坑が検出されているが、遺構、遺物量ともに密度は非常に薄く、在房遺跡の中心が、山田川付近に存在していることが推察される。



- | | | |
|------------|-----------------|------------|
| 1 在房遺跡 | 13 梅原摩摩屋遺跡 | 25 東殿Ⅲ遺跡 |
| 2 久戸Ⅱ遺跡 | 14 安樂寺跡 | 26 東殿Ⅳ遺跡 |
| 3 久戸遺跡 | 15 宗守遺跡 | 27 東殿遺跡 |
| 4 久戸東遺跡 | 16 梅原出村Ⅲ遺跡 | 28 徳成遺跡 |
| 5 神成遺跡 | 17 梅原上村遺跡 | 29 徳成Ⅱ遺跡 |
| 6 梅原安丸Ⅴ遺跡 | 18 うずら山遺跡 | 30 田尻遺跡 |
| 7 梅原安丸遺跡 | 19 梅原出村Ⅱ遺跡 | 31 梅原出村南遺跡 |
| 8 梅原安丸Ⅳ遺跡 | 20 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 | 32 竹林Ⅱ遺跡 |
| 9 梅原安丸Ⅱ遺跡 | 21 THJ-15遺跡 | 33 神宮寺塚 |
| 10 梅原安丸Ⅲ遺跡 | 22 三十三塚 | 34 竹林Ⅰ遺跡 |
| 11 梅原加賀坊遺跡 | 23 THJ-16遺跡 | 35 荒木遺跡 |
| 12 梅原落戸遺跡 | 24 東殿Ⅱ遺跡 | 36 吉江野遺跡 |

第1図 位置と周辺の遺跡 (S=1/25000)

II 調査に至る経緯と経過

平成10年（1998）、福光町北山田北部地区において、県営ほ場整備事業（担い手育成型）が策定された。この事業は、農地を扱い手に集積し、経営規模を拡大させることにより低コスト化を目指すものであり、基盤整備により水田の大区画化を行うものである。事業計画は、在房・久戸・神成・宗守の約100haを対象とし、平成10年度から平成14年度までが工期とされた。これに先立ち平成8年度に、福光町教育委員会が富山県埋蔵文化財センターから職員の派遣を受けて、事業計画地内で遺跡分布調査を行ったところ、広範囲において遺物の散布を確認した。そのため、平成10年度から国庫補助金を受けて、遺跡の範囲確認調査を実施した。試掘調査の結果、遺跡が広範囲にわたって遺存していることが確認されたため、富山県農地林務部、富山県教育委員会、地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ねた。その結果、遺跡は原則として盛土を行うことで水田下に保存し、一部の面工事、農道建設、用排水路部分のような遺跡が保存できない場所について本調査を実施することとなった。以降、工事に先行して試掘調査を継続して行い、平成12年度からは並行して本調査を行っている。

平成17年度の発掘調査は、5地区220m²、6地区280m²、7地区1,410m²の合計1,910m²である。3地区とも在房遺跡の西側に位置する。対象地は、水田の面工事のために削平されることから、本調査を実施することになった。

第1表 調査経過

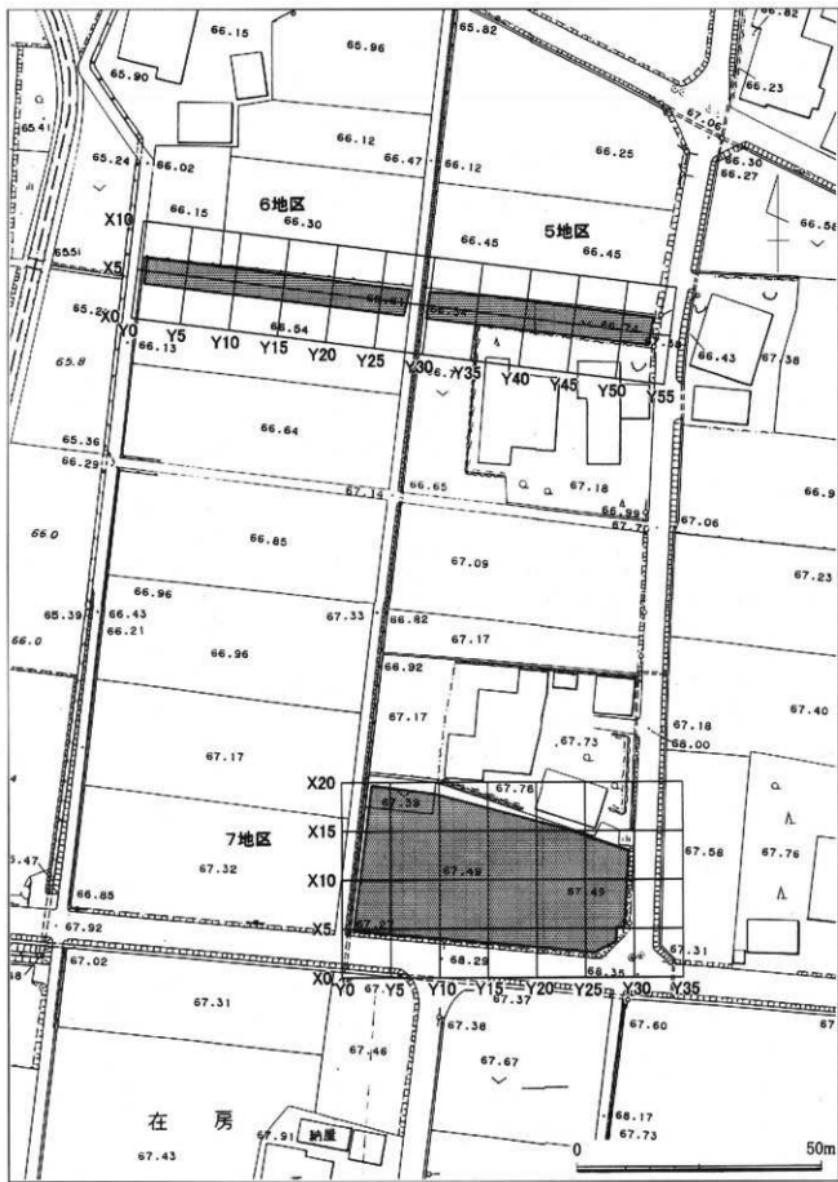
	遺跡名	試掘調査対象面積	本調査面積
平成10年度	在房遺跡	約6ha	—
平成11年度	在房遺跡	約24.3ha	—
久戸遺跡	約9.4ha	—	
平成12年度	在房遺跡	約6.1ha	3.175m ²
久戸遺跡	約6ha	—	
久戸II遺跡	約3.8ha	—	
神成遺跡	約9.3ha	—	
在房遺跡	—	305m ²	
平成13年度	神成遺跡	約18.3ha	—
久戸II遺跡	約0.6ha	—	
在房遺跡	—	640m ²	
平成14年度	久戸II遺跡	—	1,040m ²
宗守遺跡	約1.7ha	—	
神成遺跡	約3.2ha	—	
梅原胡摩堂遺跡	約4.2ha	—	
平成15年度	神成遺跡	—	1,599m ²
久戸II遺跡	—	1,743m ²	
平成16年度	神成遺跡	—	2,620m ²
久戸II遺跡	—	2,120m ²	
平成17年度	在房遺跡	—	1,910m ²
神成遺跡	—	3,370m ²	

第2表 遺跡の概要

遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
在房遺跡	縄文時代後期、古墳時代、古代、中世	堅穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、井戸、柱穴	縄文土器、須恵器、土師器、製造土器、中世七輪器、珠洲、青磁、白磁、木製品、紡錘車
久戸遺跡	縄文時代、中世	柱穴、土坑、溝	縄文土器、須恵器、上師器、珠洲、瀬戸、青磁、白磁、肥前系陶磁器
久戸II遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世	堅穴住居？、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、上師器、硯、土鍬、中世七輪器、珠洲、木製品
神成遺跡	縄文時代、古墳時代、古代、中世、江戸	堅穴住居、土坑、柱穴、溝	須恵器、土師器、中世七輪器、珠洲、青磁
宗守遺跡	縄文時代中期、中世、近世	柱穴、土坑、溝	縄文土器、石斧、上師器、須恵器、中世七輪器
梅原胡摩堂遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、江戸	壇跡、掘立柱建物、溝、掘、竪穴、井戸	縄文土器、打製石器、土師器、須恵器、中世上師器、珠洲、青磁、白磁、越前、越中漸化、瀬戸美濃、石臼



第2図 遺跡範囲と調査区位置図 ($S = 1/5000$)



第3図 調査区割図 (S=1/1000)

III 調査の概要

1. 調査の方法

(1) 発掘調査

調査は、まず表土及び耕作土をバックホーによって掘削し除去した。試掘調査の結果を踏まえて、黒褐色粘質の遺物包含層直上までを掘削した。

表土を掘削した後、調査区内にグリッド杭を設置した。7地区のグリッドは、国土座標（世界測地系第VII系）にあわせて調査区外の南西部に基準点を設置し、2mのメッシュを設定した。グリッド名は、基準点から北に向かってX1・X2・X3…、東に向かってY1・Y2・Y3…とし、一つのグリッドを表す際は、南北の「X1Y1」とした。なお、5・6地区については国土座標によらず、両地区を通るラインを任意に設定し、その両端に仮杭を設置した。グリッド名は6地区西側に設置した杭を「X5Y0」とし、東に向かってY値が増えるようにした。

グリッド設定後、人力による包含層の掘削を行い、あわせて遺構の検出も行った。検出した遺構については、半裁して埋土の状況を確認・記録したのち、順次完掘した。

検出した遺構については、1/100の概略図を作成し、調査区ごとに全ての遺構について遺構番号をついた。遺構の断面図、及び調査区壁面の断面図については、オートレベルを用いて手実測を行った。調査区全体の平面図については、ラジコンヘリコプターで図化写真を撮影して図化した。なお、5地区については、立ち木などのため図化写真の撮影が困難なことから、トータルステーションを用いて平面測量を行った。

(2) 整理作業

実測図については、平面図は航空写真測量を、各遺構の断面図については手実測にて行った後にデジタルトレースを行い、レイアウトまでをデジタル処理した。出土した遺物については、取り上げた遺物カードごとに洗浄、注記、復元、実測、トレースを行った。注記には墨汁と白のポスターカラーを使用し、面相筆で行った。

(3) 写真撮影

遺構の写真については、35mm版一眼レフカメラを主とした。また、調査区の全景写真や、特に重要なと思われる遺構については6×7版一眼レフカメラを使用した。ラジコンヘリコプターを使った空中写真撮影には、6×6版カメラを使用した。遺物の写真については、4×5版カメラを使用した。

2. 発掘調査日誌抄

6月15日	基準点測量・水準点測量	8月1日	7地区 遺構完掘、6地区 遺物包含層
6月16日	7地区 重機掘削開始		掘削開始
6月22日	7地区 遺物包含層掘削開始	8月2日	6地区 遺構検出開始
7月5日	7地区 遺構検出開始	8月5日	6地区 遺構掘削開始
7月6日	7地区 遺構掘削開始	8月11日	5・6地区 遺構完掘・全景撮影
7月25日	5・6地区 重機掘削開始	8月24日	5・6・7地区 空撮
7月27日	5地区 遺物包含層掘削開始	8月25日	7地区 補足調査・実測作業
7月28日	5地区 遺構検出、遺構掘削開始	8月26日	現場作業終了
		9月1日	現地撤収終了

3. 5 地区の概要

(1) 基本層序

5地区における基本層序は、厚さ20~30cmの畠地の耕作土を除くと、遺物包含層を確認することができず、灰黄褐色砂質土の地山面に達した。遺構は、耕作土を除去した段階で、地山を振り込む状態で検出した。なお、民家の裏側という立地から、調査区西側付近には現代の擾乱をいくつか確認したが、遺構は削平されておらず、比較的良好な遺存状態であった。

(2) 遺構の概要（第5図）

調査区の西端で遺構が密集していた。溝以外の遺構については遺物の出土も少なく、性格は不明である。調査区の東部においては、河道と考えられる落ち込みを確認した。調査区の中心部では、中央よりやや西より幅3mほどの溝を検出したが、そのほかはほとんど遺構が見られず、近代の生活において出た廃棄物を処理した穴が点在していた。

SD01

調査区の西端に位置し、南北に走る溝である。幅約1.3mで、遺構内においてP30、P31、P32を検出した。またP31より北側、溝の東半が西半より深くなっている。深くなった部分の底面は凸凹している。埋土は暗褐色砂質シルトで、底部には径1cm程度の円碟が多く検出された。また底部に近いところはマンガンも多く含まれていた。遺物の出土量は他の遺構と比べて多く、土師器や須恵器、珠洲が出上している。

SD02

調査区の西部に位置し、幅約80cm、深さ40~50cmの南北方向の溝である。現況の南では、東側にテラス状に残っている。また南側ではSD04と重複しており、調査区の南壁断面で確認したところ、SD02が先行するものと確認した。埋土は暗褐色粘土でマンガンを含んでいる。出土遺物はない。

SD03

調査区西部に位置し、幅45cm、深さ20cm程度で調査区南端から北へ延びる溝である。なお、調査区の南端から1.2mのところでこの溝は終結している。埋土は黒褐色土である。出土遺物はない。

SD04

調査区西部に位置する、幅60cm、深さ約20cmの南北方向の溝である。溝の南半分はSD02と重複しており、前後関係は前述のとおりである。埋土は灰黄褐色砂質土で、北端で土師器皿や陶器碗が出上している。

SD05

調査区のほぼ中央に位置する、幅約3.5m、深さ40~45cmの南北方向の溝である。埋土は褐灰色砂質シルトである。出土遺物はない。

SD06

調査区の東部に位置し、調査区東端から西へ約12mの地点まで広がる。深さは地表面から最大1.3mを測る。埋土は2層に分層でき、上層は黒褐色砂質シルトでマンガンを含んでいる。下層は黒色粘土でかなり粘りが強く、遺物はこの層から出土している。底面は暗灰色粗砂である。一番低い地点付近で縄文土器が数点まとまって出土している。そのほか打製石斧が1点出土している。

SK01

調査区の西部に位置する。SD02に切られるため、現況では55cm×45cm、深さ19cmの不定形の土坑である。埋土は灰褐色土で、土師器皿が1点出土している。

P1

調査区の西部に位置する、55cm×45cm、深さ29cmの楕円形のピットである。西側が深くなっている、東側がテラス状に残る。埋土は暗褐色粘土で、土師器片が出土している。

P2

調査区の西部に位置する。P3に切られるため現況では45cm×25cm、深さ25cmのピットである。埋土は暗褐色粘土で、土師器片が1点出土している。

P3

調査区の西部に位置し、P2と重複する。50cm×40cm、深さ28cmの楕円形のピットである。埋土は黒褐色粘土で、土師器片が1点出土している。

P25

調査区の中央部南端に位置する。20cm×15cm、深さ16cmの円形のピットである。埋土は黒褐色粘土で、土師器片が2点出土している。

P28

SD01と重複する。調査区の南端に位置しているため、現況で65cm×25cm、深さ28cmで平面形は方形を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトでSD01と同色である。出土遺物はなく、SD01の底面において検出されたため、SD01との時期差は不明確である。

P29

SD01と重複する、40cm×45cm、深さ38cmの円形のピットである。埋土及び検出状況に関してはP28と同様であり、出土遺物はなく、SD01との時期差は不明確である。

P30

SD01内で検出した。調査区の南端に位置しているため、現況で30cm×25cm、深さ18cmの円形のピットである。埋土は黒色砂質シルトで、断面は半円形を呈する。出土遺物はない。

P31

SD01内で検出した。SD01のほぼ中央部に位置し、溝内で更に深く落ち込んでいる部分と重複し、北側の一部が破壊されている。現況で40cm×45cm、深さ8cmの円形のピットである。埋土は黒色砂質シルトで、断面は半円形を呈している。出土遺物はない。

P32

SD01内で検出した。P29とP31の中間に位置する、径45cm、深さ19cmの円形のピットである。埋土は黒色砂質シルトで、断面は半円形を呈している。出土遺物はない。

(3) 遺物の概要（第10図1～12 写真図版7）

5地区で出土した遺物は、石器・縄文土器・土師器・須恵器・青磁・珠洲である。遺物量は少ないが、他の調査区と比べて、遺構に伴うものが多い。以下、遺構ごとに列記する。

SD01

SD01からは、土師器、須恵器、珠洲が出土した。

1は柱状高台を持つ土師器の皿である。口クロ成形であり、底部外面上には回転糸切り痕が残る。底部内面の中央には、指圧痕がある。色調は、にぶい黄橙色を呈する。11世紀後半～12世紀前半のものと考えられる。

2は須恵器の壺の破片である。体部外面上には平行タタキが、内面には同心円の当て具痕が残る。色調は

褐灰色を呈する。8世紀後半頃のものと考えられる。

3は珠洲の鉢の口縁部である。口径は31.9cmを測る。体部は直線的で、口縁部付近でやや内湾する。鉢目は確認できない。色調は黄灰色を呈する。珠洲Ⅲ～Ⅳ期、13世紀後半～14世紀前半のものと考えられる。

SD04

SD04からは、土師器、陶器が出土した。

4は、ロクロ成形の土師器皿である。底径は復元径で4.6cmを測る。体部内外面にはロクロナデが、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調は褐色を呈する。11世紀後半のものである。

5は、越中瀬戸の内禿皿の底部と考えられる。体部をロクロ成形した後、高台付近を回転ケズリ調整し、削り込み高台としている。体部内外面には浸け掛けによる鉄釉が施される。使用のため、高台接地面と内面は非常に平滑である。16世紀末～17世紀中頃のものと考えられる。

SD06

SD06では、打製石斧、縄文土器が出土した。

6は打製石斧である。体部中央で折れているものの、くびれた状況が確認できることから、撥型タイプの石斧と考えられる。石材は流紋岩、重量は413.4gを量る。縄文時代中期のものであろう。

7は縄文土器の破片である。体部外面には斜め方向の条痕文が施される。胎上はにぶい黄褐色を呈する。

8は縄文土器の破片である。体部外面には多方向の条痕文が施され、煤が付着する。色調はにぶい黄褐色を呈する。新崎式に比定される。

P1

9はロクロ成形の土師器の皿である。口縁端部の外側にやや面を持たせている。色調はにぶい橙色を呈する。12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

遺物包含層

10は鉢類の底部と思われる。体部の内外面にはミガキ痕が確認でき、底部から体部にかけての内外面には黒斑が残る。縄文土器とは明らかに胎土が異なるため、弥生もしくは土師器の範疇に含まれるものと思われるが、時期は不明である。

11は土師器の皿である。底径6.0cm前後でロクロ成形と思われるが、器壁が摩滅しているため調整は不明である。色調は橙色を呈する。11世紀後半のものである。

12は青磁の碗である。高台径は復元で4.1cmを測る。体部の内面には灰釉が、外面にはオリーブ褐色を呈する厚い綠釉が施され、高台部分は露胎になっている。高台は削り込みにより成形されており、接地面は使用により平滑になっている。15世紀頃のものと思われる。

4. 6地区の概要

(1) 基本層序

基本層序については、隣接する5地区と大きな違いはない。6地区は南に残土置場があり、調査区の東側半分近くがその擾乱を受けていた。だが、東側の遺構面と西側の遺物包含層、遺構については、比較的良好に遺存していた。

(2) 遺構の概要（第6・7図）

全体的に遺構密度が低く、また遺構に伴う遺物の出土は2点だけである。よって、各遺構の時期を推定することは難しい。ただ、6地区内の遺構埋土はほとんどが黒褐色砂質シルトであり、出土した遺物が中

世の時期のものであることから、多くの遺構は中世に形成されたものと考えられる。

P44

調査区の西側、やや南寄りに位置する。直径30cm・深さ20cmの円形のピットである。埋土は黒褐色砂質シルトである。13~14世紀代のロクロ成形の土師器皿が1点出土している。

P61

調査区の東側に位置する。直径30cm・深さ8cmの浅い円形のピットである。埋土は黒褐色砂質シルトである。図示はできなかったが、ロクロ成形の土師器皿の小片が1点出土している。

SD01

幅50~60cm、深さ10cmほどの浅い溝である。調査区西端から東に延び、Y8付近で終わっている。埋土は黒褐色砂質シルトで、マンガンが混じる。出土遺物はない。

SD02

調査区の中央付近で確認した、長さ4.6m、幅70cm、深さ20cmほどの溝である。埋土は黒褐色砂質シルトである。SD01の延長線上に位置することから、同一の溝の可能性もある。出土遺物はない。

(3) 遺物の概要（第10図13~21 写真図版8）

P44

13はロクロ成形の上師器の皿である。復元径で、口径9.6cm、底径5.4cmを測る。体部内外面にはロクロナデが、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。12世紀後半のものである。

遺物包含層

14は縄文土器の口縁部である。外面に単節の斜縄文を施し、口縁端部は丸く收めている。15は縄文土器の浅鉢の底部と考えられる。体部に縄文を施し、二条の沈線を幅約1cmの間隔で施したうえで、体部下端部分の縄文を磨り消している。底部の内外面には黒斑が見られる。縄文時代後期前葉の気屋II式に比定される。16は縄文土器の破片である。口縁端部には煤が付着し、色調はにぶい褐色を呈する。

17は須恵器の底部破片である。ロクロ成形で、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調は灰色を呈する。8世紀前半～中頃のものと考えられる。

18は土師器の皿である。内外面ともに摩滅しているため調整は不明であるが、ロクロ成形の可能性がある。12世紀後半～13世紀前半頃のものであろう。

19は古瀬戸の縁釉小皿である。復元で、口径9.8cm、底径3.8cm、器高1.9cmを測る。体部をロクロ成形し、底部外面には回転糸切り痕が残る。口縁端部には、黄褐色を呈した灰釉が浸け掛けされている。内面見込み部は磨かれたように平滑で、使用痕跡がうかがわれる。腰部が緩やかに立ち上がることから、15世紀後半の古瀬戸後期様式IV期新段階に比定される。

20は珠洲の擂鉢の口縁部破片である。口径は復元で27.5cmを測る。口縁内部がやや内湾し、端部はナデによって面を持たせている。色調は灰白色を呈する。21は珠洲の擂鉢の口縁部である。口径は30.8cmを測る。体部は直線的に延び、端部はやや丸みを持たせて收めている。卸目が4条確認できるが、卸目の単位は不明である。やや焼成不良で、色調は全体に黄灰色を呈する。珠洲II～III期、13世紀のものと考えられる。

5. 7地区の概要

(1) 基本層序

7地区の基本層序は、耕作土、旧表土、遺物包含層、地山である。旧表土の下には、遺物包含層である黒褐色砂質シルト層が調査区全体に広がり、遺存状態は比較的良好であった。地山面は、東で標高67.1～67.2m、西で標高66.9～67.0mと、僅かながら東から西に向かって傾斜している。全体的に、攢乱などもほとんどなく、非常に安定した層位であった。

(2) 遺構の概要（第8・9図）

7地区では、溝・土坑・石列などを検出したが、石列を除くと遺物を作うものが非常に少なく、各遺構の時期を決定するのは困難である。以下遺構ごとに列記する。

SX01

調査区西側で、南北方向に伸びる長さ15.5m、幅0.4～1.2mの石列を検出した。石列は、拳大から2～3cmほどの小石がパラス敷きのように薄く並び、層的な厚みはない。北端は試掘トレンチに切られており、南端はX4Y8付近で丸く終わっていた。土師器、須恵器、珠洲が出土している。

SD01

調査区の東側で南北方向に検出した。幅は2.6～4.0mで、深さは10cm前後と非常に浅い。埋土は暗褐色砂質シルトである。縄文土器の小片が3点出土しているが、いずれも遺構検出時に出土しており、遺構の時期を決定するものとは言い難い。

P42

調査区の南東部、密集したピット群の内の1つである。直径30cm、深さ15cmの円形のピットで、埋土は褐灰色砂質シルトである。小片のため図示できなかったが、縄文土器が1点出土している。7地区で唯一の遺物を含むピットである。

(3) 遺物の概要（第11～13図 写真図版9・10）

7地区は、包含層も含めた全体の遺物量が、コンテナ2箱程度であった。遺構に伴う遺物は石列が大半で、土坑、溝に伴うものはごく僅かである。出土した遺物は、石器、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、青磁、珠洲などである。

SX01

SX01からは、土師器、須恵器、陶器、珠洲、白磁、磁石が出土した。

22～24は須恵器の杯身である。22は復元で高台径5.6cmを測る。内外面にロクロナデを施し、高台は貼り付け高台である。高台接地面には使用痕が見られ、平滑である。色調は灰白色を呈する。23は、復元で高台径5.1cmを測る。体部内外面はロクロナデ、底部外面は回転ヘラケズリを施し、やや内湾する断面台形の高台をナデ付けている。高台接地面は平滑であり、使用の痕跡が見られる。24は、復元で高台径7.6cmを測る。体部はロクロナデ、底部外面はヘラ起こしの後、断面台形の高台が貼り付けられている。体部内面にはロクロの痕がなく平滑で、使用の痕跡が認められる。色調は全体に黄灰色を呈する。これらは、いずれも8世紀後半～9世紀前半に位置付けられる。25は須恵器の裏の体部破片である。体部外面に平行タタキが、内面には同心円の当て具痕が残る。色調は灰白色を呈する。8世紀後半頃のものと考えられる。26は須恵器の破片である。体部外面には平行タタキの後、一部に横方向のカキ目が施される。内面には同心円の当て具痕が残る。色調は灰白色を呈する。こちらも、8世紀後半頃のものと考えられる。27は、珠洲の大甕の口縁部破片である。体部は緩やかに内湾し、口縁部は強く外反させ、端部は丸み

を持って収めている。体部外面には左上がりの平行タタキが、内面には当て具痕が残る。色調は全体に灰白色を呈し、体部外面には自然落灰が見られる。珠洲Ⅲ～Ⅳ期、13世紀後半～14世紀前半のものと考えられる。28は、珠洲の壺の口縁部破片である。口径は復元で19.5cmを測る。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部にかけてやや外反し、端部には面を持たせている。体部外面には平行タタキ、内面には当て具痕が認められる。色調は全体に褐灰色を呈する。珠洲Ⅳ期、14世紀前半のものと思われる。29は珠洲の壺の頸部破片と思われる。焼成不良のため、調整は不明瞭である。色調は淡黄色を呈する。30は珠洲の捕鉢の口縁部破片である。口径は復元径で28.5cmを測る。ロクロで引き上げたのち、口縁端部に平らな面を持たせている。体部内面には、2.2cm幅に11条の卸目が施されている。ただし、卸目の単位については両端部が確認できないため不明である。色調は黄灰色を呈し、胎土はやや粗い。31は珠洲の捕鉢の底部である。復元径で底径は10.2cmを測る。体部内面に1.7cm幅の卸目が3帯確認でき、1帯の条数は8条である。内面および底部外面は使用により磨り減っている。色調は、全体に黄灰色を呈する。32は珠洲の捕鉢の底部破片である。底部径は12.0cmを測る。底部、体部とも器壁は厚く、体部はロクロナデによって直線的に開く。体部内面には幅2.1cmの卸目が6帯確認でき、1帯の卸目は9条である。色調は灰色を呈する。珠洲Ⅲ～Ⅳ期、13世紀後半～14世紀前半のものである。33は珠洲の捕鉢の体部破片で、内面に卸目が確認できる。1帯の幅が1.5cmで、その中に7条の卸目が認められる。使用による摩滅が著しい。珠洲Ⅲ～Ⅳ期、13世紀後半～14世紀前半のものと考えられる。34・35・36はいずれも珠洲の破片である。34は、体部外面には左上がりの平行タタキが、内面には当て具痕が残る。色調は灰白色を呈する。35・36は体部外面には目の細かい平行タタキが、内面には押圧具の圧痕が残る。色調は灰色を呈する。これらは、いずれも珠洲Ⅲ～Ⅳ期、13世紀後半～14世紀前半のものと考えられる。

37は砾石である。流紋岩の円礫を割り取り、側面の4か所を使用している。重量は135.3gを量る。時期は不明である。

なお、小破片のため図示はしなかったが、八尾焼と思われる破片を1点確認している（写真図版9-60）。内外面にロクロナデ調整が施されるが、器形は不明である。色調は灰白色を呈する。13世紀後半頃のものと考えられる。

SD01

38は繩文土器で、深鉢の口縁部破片と思われる。色調は淡黄色を呈する。繩文時代後期以降と考えられる。

遺物包含層

55～59は打製石斧である。55は体部中央がくびれた形状で、いわゆる撥型のタイプと考えられる。原石から大きく剥片を割り取った後に体部両側から打撃を加えて加工している。円状の刃端部が滑らかなことから、使用の痕跡が伺われる。石材は砂岩で、重量は807.0gを量る。56は、55と同様に撥型タイプの形状で、中央付近にくびれが確認できるが半分に折れている。石材は流紋岩で、重量は375.2gを量る。57も同様の撥型タイプであるが、55・56に比べて小ぶりである。石材は安山岩で、重量は414.0gを量る。58は体部で半分に折れた状態であるが、他と異なり体部中央にくびれが無く短冊状である。端部には使用の痕跡が認められる。石材は流紋岩で、重量は389.9gを量る。59はくびれた形状は確認できるが、他と比べて厚さが薄いため、基部の可能性もある。石材は流紋岩、重量は171.1gを量る。

39は繩文土器の深鉢である。底部から体部下半にかけての破片で、底径は7.0cmを測る。体部外面には斜め方向にハケ目のような調整痕が残る。底部内面には煤が付着する。40は繩文土器の破片である。器

種は不明だが、外面には充填織文を施す。縄文時代後期のものと考えられる。41は縄文土器の口縁部の破片である。口縁付近はやや肥厚し、端部はまるく収まる。外面には織文を施している。胎土はやや粗く、1.5mm程の砂礫を多く含む。色調は橙色を呈する。

42は鉢類の底部である。底径は5.0cmを測り、体部はミガキによる調整が為されている。底部内面には黒斑が見られる。色調はにぶい橙色を呈し、胎土のきめは細かい。43は口縁部破片である。内面にはナデが施されるが、外面は剥離しているためよく分からない。胎土はやや粗く、色調は橙色を呈する。42・43は、39~41とは明らかに胎土が異なっており、弥生土器もしくは十師器の範疇に含まれると考えられる。時期は不明である。

44は無高台の須恵器の杯身である。底径は6.6cmを測る。体部はロクロナデが為され、底部外面はヘラ起こしの痕跡がある。色調は灰白色を呈する。7世紀後半~8世紀前半のものと考えられる。45は須恵器の破片である。外面には時計周りの方向にカギ目を施し、内面にはロクロで引き上げた後に粘土の円盤によって閉塞された痕跡が確認できる。このことから、器種は横瓶と考えられる。色調は黄灰色を呈し、外面の一部には自然落灰が見られる。46は須恵器の甕の体部破片である。体部外面には二方向の平行タタキが、内面には同心円の当て具痕が残る。色調は灰白色を呈する。8世紀後半のものと考えられる。47は須恵器の甕の体部破片である。体部外面に多方向の平行タタキが、内面には同心円の当て具痕が残る。色調は灰白色を呈する。8世紀後半のものと考えられる。

48は灰釉陶器の口縁部破片である。口縁端部を強く外反させ、外面には灰釉がハケ塗りされる。色調は褐灰色を呈する。猿投窯編年の黒笛14号~黒笛90号窯式で、9世紀末~10世紀前半のものと考えられる。

49は土師器の底部と思われる。底径は5.0cmを測る。器厚が1.2cmほどあり、摩滅が著しく内外面の調整は不明である。色調は浅黄橙色を呈する。50は非ロクロ成形の土師器の皿である。口縁部のみの小破片で、やや厚みのある器壁を持つ。口径4.1cm、底径3.6cm、器高1.3cmを測る。内外面とも摩滅により調整は不明である。色調は黄橙色を呈する。12世紀後半~13世紀前半のものと考えられる。

51は珠洲の甕の底部破片である。底径で14.3cmを測る。体部外面には左上がりの平行タタキが、内面にはヨコナデが施される。色調は灰白色を呈する。珠洲Ⅲ~Ⅳ期、13世紀後半~14世紀前半のものと考えられる。52は珠洲の破片である。外面には左上がりの平行タタキが、内面には当て具痕が残る。色調は灰白色を呈する。珠洲Ⅲ~Ⅳ期、13世紀後半~14世紀前半のものと考えられる。

53は越中瀬戸の擂鉢の体部破片である。体部内外面にロクロナデ調整が施され、内面には鉗口が確認できる。にぶい黄橙色の胎土に、鉄釉がハケ塗りされている。16世紀末~17世紀初めのものと考えられる。54は陶器の皿である。口径10.2cm、底径3.4cm、器高2.3cmを測る。体部をロクロで成形したのち、外面下半には回転ヘラケズリが施される。底部外面には削り込みの高台がつく。口縁部から体部にかけて灰白色を呈する釉薬が掛け掛けされているが、焼成不良のため発色は良くない。見込み部は、ロクロ口が消えており使用の痕跡が認められる。17世紀前半~中頃のものと考えられる。

IV 自然科学分析

1. 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

(1) はじめに

佐房遺跡から検出された土壌試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第3表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年年代を算出した。

第3表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-4796	調査区：5地区 遺構：SD06 遺物No：AF-5	試料の種類：土壌 状態：dry カビ：無	湿式筋い分け（106 μm以下を使用） 超音波煮沸洗浄 酸洗浄（塩酸1.2N）	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4797	調査区：7地区 遺構：SX01下 遺物No：AF-7	試料の種類：土壌 状態：dry カビ：無	湿式筋い分け（106 μm以下を使用） 超音波煮沸洗浄 酸洗浄（塩酸1.2N）	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

(3) 結果

第4表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年年代に較正した年代範囲、曆年較正に用いた年代値を、第4図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

曆年較正

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ曆年年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年年代範囲であり、同様

に σ 歴年代範囲は95.4%信頼限界の歴年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に歴年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は歴年較正曲線を示す。それぞれの歴年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

第4表 放射性炭素年代測定及び歴年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	歴年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を歴年代に較正した年代範囲	
				1σ 歴年代範囲	2σ 歴年代範囲
PLD-4796	-15.41 \pm 0.15	2015 \pm 25	2016 \pm 23	45BC (68.2%) 20AD	90BC (2.5%) 70BC 60BC (92.9%) 60AD
PLD-4797	-16.67 \pm 0.15	2500 \pm 25	2500 \pm 23	770BC (8.7%) 740BC 690BC (6.5%) 660BC 650BC (53.0%) 550BC	780BC (95.4%) 530BC

(4) 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び歴年較正を行った。得られた歴年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それより確かな年代値の範囲が示された。

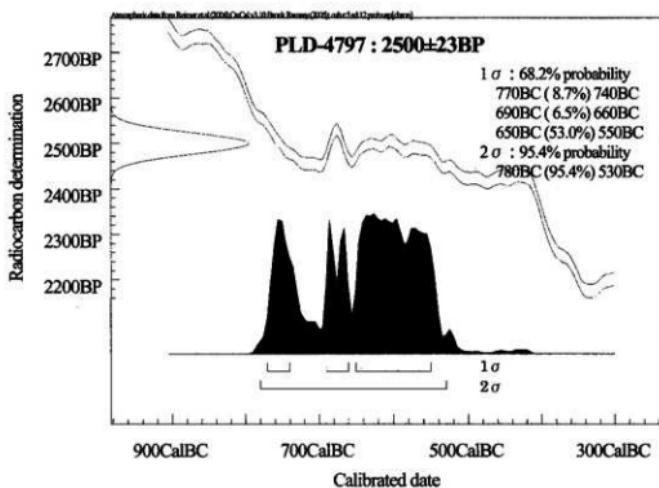
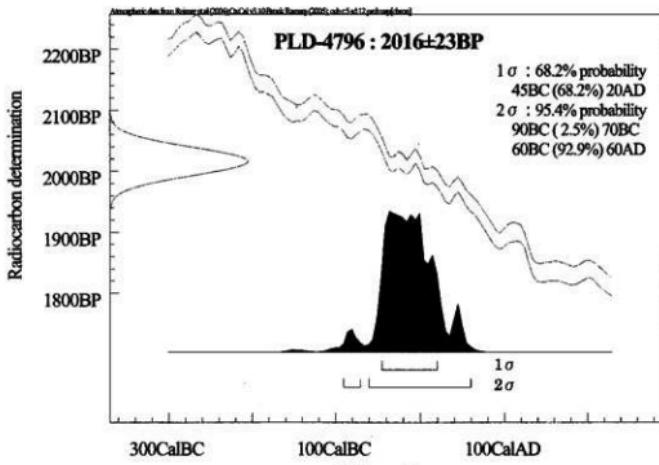
5地区SD06 (PLD-4796) では、 1σ 歴年代範囲においてCal BC 45–AD20年) 68.2%、 2σ 歴年代範囲においてCal BC 60–AD60年) 92.9% である。

7地区SX01下層 (PLD-4797) では、 1σ 歴年代範囲においてCal BC 650–550年) 53.0%、 2σ 歴年代範囲においてCal BC 780–530年) 95.4% である。

調査の知見等では、遺物包含層下の無遺物層であることと時代は不明であるが、土壌の年代測定から、5地区SD06 (PLD-4796) が弥生時代中期、7地区SX01下層 (PLD-4797) が绳文時代晚期終りの土層であることが理解された。なお、これら土壌の花粉分析では、花粉化石を全く含まないことから、この時代の旧地表面であることが分かった。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425–430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43(2A), 355–363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3–20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmeli, JR Sounion, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029–1058.



第4図 曆年較正結果

2. 遺跡の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

(1) 試料と方法

花粉化石群集の検討は、AF-5 (SD06) およびAF-7 (SX01下層) の合計2試料について行った。AF-5 (SD06) は黒色粗砂混じり粘土、AF-7 (SX01下層) はオリーブ黑色粗砂混じり粘土で褐鉄鉱が認められる。

花粉化石の抽出は、試料約2gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（冰酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的の処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロビペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。

(2) 花粉化石群集の記載

いずれの試料も花粉化石の産出個数が非常に少なく、花粉化石分布図として示すことができなかった。産出した分類群・個数は、AF-5 (SD06) が不明花粉1、AF-7 (SX01下層) がカヤツリグサ科1、不明花粉3である。

(3) 考察

検討した結果、いずれの試料も十分な花粉化石を産出しなかったため、古植生を推定することはできなかった。花粉化石は水成堆積物であれば良好に保存されるが、旧地表面で形成された土壤のような酸化条件下では、化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる触害も受ける。検討した試料は粘質土であり、水付き堆積物の可能性が考えられたが、花粉化石が保存されていないことから、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものとは考え難い。検討した試料は、花粉化石が保存されていないこと、概ね黒色土であることから、旧地表面で形成された土壤であると推定される。

V まとめ

1. 遺構

(1) 5地区

調査区東側で、南北方向に続く自然流路と考えられる大溝（SD06）を検出した。この溝の延長は、福光町教育委員会が平成10年度から継続して行ってきた試掘調査でも確認されているものである⁽¹⁾。SD06の溝内に堆積した黒色粘質土を、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、弥生時代中期の年代を得た。また、土壤分析を行った結果、ほとんど花粉は検出されず、黒色粘質土ではあるが、常に水に浸っているような状況ではなかったことが判明した。このことから、黒色粘質土は遅くとも弥生時代中期以降には旧地表面となっていたと考えられ、大溝とするならば、短期間に一括埋没した自然流路と考えられる。一番低いところから縄文土器数点がまとめて出土しているが、弥生時代中期頃に流入して二次的に堆積したものであろう。

また調査区西側では、数条の溝とピット群を検出した。このうちSD01では、床面でピット（P30・P31・P32）が検出された。これらのピット内からの遺物は無く、検出状況からもSD01との前後関係は不明であった。なお、SD01からは、11～12世紀頃の土師器皿や、13～14世紀前半の珠洲が出土している。このことからSD01は14世紀前半頃には埋没した、中世前半期の遺構ではないかと考えられる。

(2) 6地区

溝、ピットを検出した。特に、調査区東側において検出したピット群の中には、ピットが同一方向に規則正しく並ぶものがあり、柵の可能性が考えられる。掘立柱建物跡の可能性も考えたが、ピットの間隔が不揃いであることや、対応する柱穴が検出できないことなどから、可能性は薄い。なお、柵の時期については、遺構に伴う遺物が無いため、不明である。時期的に新しいものであれば、稚木か畔木の可能性もある。

(3) 7地区

調査区西側において、石敷きの遺構と思われるSX01を検出した。このSX01では、石に混じって土師器、須恵器、陶器、珠洲、白磁、砥石などが比較的まとめて出土している。遺物の時代は奈良時代後期から鎌倉時代中期まで幅広くあることと、7地区ではSX01を省いて、遺物の出土がひょうに散在的で、なおかつ少量であることから、SX01で出土した遺物は石敷きの石と共に別の場所から持ち込まれた可能性も考えられる。帯状に続くことから、水田の灌漑を抜く暗渠排水の石敷きの可能性も考えたが、溝状の掘り込みもなく、また自然科学分析では土壤に花粉が残らず滯水性が無いことが明らかになり、暗渠排水のための石敷きでなさそうである。なお、石敷きのベースの土壤をAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、縄文時代晚期終わりの年代を得た。

また、調査区の中央部では、南西から北東方向に走るSD01を検出した。SD01からは縄文土器の小片3点が出土しているが、これらは遺構の埋土直上で確認されたもので、出土状況からSD01に伴う遺物ではないと考えられる。包含層の遺物から考えて、古くとも室町時代を遡るものではないであろう。

この他、調査区南東部、SD01の西側（X6Y16～18付近）、調査区北西部の3カ所でピット群が確認されたが、P42から縄文土器の小片が1点出土した以外に、遺物は伴わなかった。そのため、正確な時期や正確を特定することはできなかった。

2. 遺物

今回の調査では、打製石斧が6点出土した。これらの石斧は、5地区のSD06からの出土品以外は、いずれも7地区的遺物包含層からの出土であった。形状は大小あるが、いずれも川原石を打欠いて成形した扁平な打製石斧である。7地区出土の5点のうち4点には、すべて石斧の中央部で折れており、共通した使用状況をうかがわせる。遺構に伴っていないため、出土状況から確認できることは少ないが、これと同様な破損の見られる打製石斧は、徳成遺跡、五瀬遺跡、天神B遺跡など平野部の遺跡でも確認されている⁽²⁾が、当遺跡同様、遺構に伴って出土した例は確認されていない。

出土した土器をみると、個体数としてまとまりをもつのは、13世紀から14世紀にかけてで、珠洲など在地性の強い上器からなり、この頃から付近に安定した集落の形成が推測できよう。

3. 小結

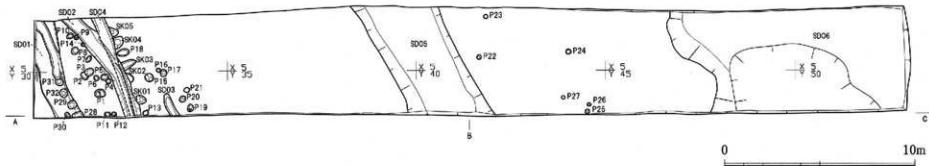
今回の調査は、3地区ともに遺構密度が薄く、遺物の出土も少量であった。在房遺跡は、1次、2次調査が行われた遺跡の北東部（1・2・3地区）の山田川近辺に古代、中世の集落が認められ、遺跡の中心は東側にあると推察される⁽³⁾。また、在房遺跡の西側に隣接する梅原加賀坊遺跡や梅原安丸遺跡では、大井川付近を中心に、同じく古代、中世の集落群が形成されている⁽⁴⁾。今回の調査区は、在房遺跡の範囲でも西端に位置しており、試掘調査の結果を見ても遺跡が希薄な地域であったと考えられる。このことから、今回の調査区は、東と西に展開する集落群のちょうど狭間に位置していたと考えることができよう。

注

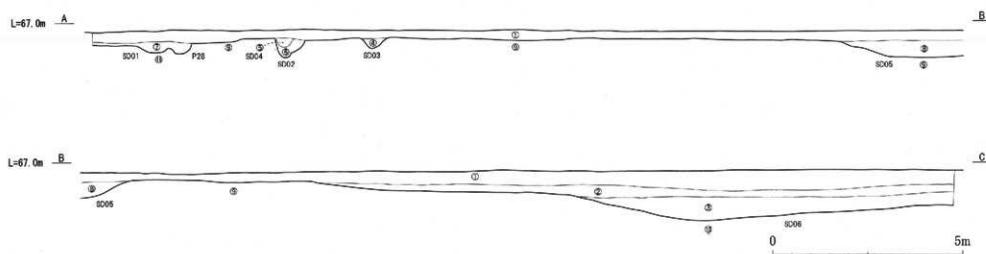
- (1) 福光町教育委員会 2003 『県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書－北山田北部地区－』
- (2) 福光町史編纂委員会 1971 『福光町史』上巻
- (3) 福光町教育委員会 2001 『在房遺跡Ⅰ』
- 福光町教育委員会 2002 『在房遺跡Ⅱ』
- (4) 福光町教育委員会 1991 『梅原安丸遺跡群Ⅰ』

図 版

5地区遺構平面図



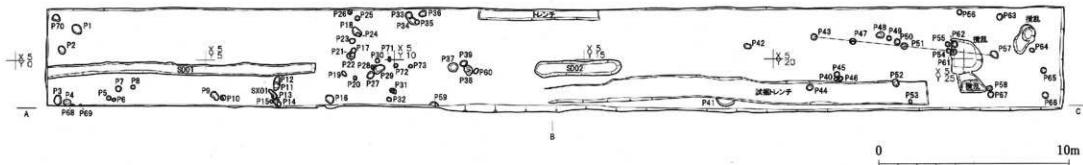
南壁土層断面図



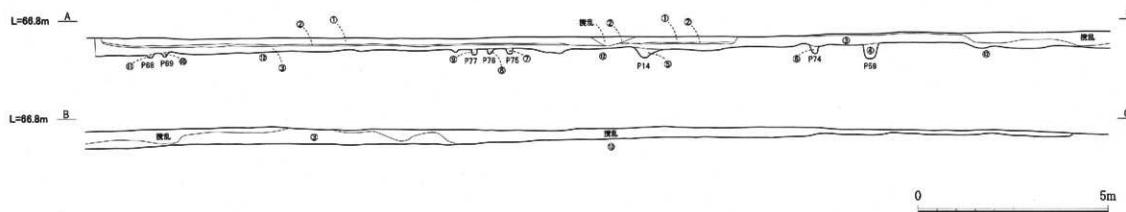
- | | | |
|---|----------------------|--------------------------------------|
| ① | 耕作土 | |
| ② | 10YR 2/2 黒褐色砂質シルト | マンガン多く含む（遺物包含層） |
| ③ | 10YR 2/1 黒色粘質土 | 遺物含む（SD06埋土） |
| ④ | 10YR 2/2 黒褐色土 | （SD03埋土） |
| ⑤ | 10YR 4/2 灰黄褐色砂質土 | 白色砂粒含む（SD02埋土） |
| ⑥ | 10YR 3/3 暗褐色土 | マンガン多く含む（SD04埋土） |
| ⑦ | 10YR 3/3 暗褐色砂質シルト | 底部に1.0~1.5cmの円礫多く含む・マンガン多く含む（SD01埋土） |
| ⑧ | 10YR 4/1 褐灰色砂質シルト | マンガン多く含む（SD05埋土） |
| ⑨ | 10YR 5/4 にぼい黄褐色砂質シルト | （地山） |
| ⑩ | N 3/ 雜灰色粗砂 | （SD06床面） |
| ⑪ | 5YR 3/4 暗赤褐色粘質土 | 礫含む（SD01床面） |

第5図 5地区遺構平面図 (S = 1/200)・南壁土層断面図 (S = 1/100)

6地区遺構平面図

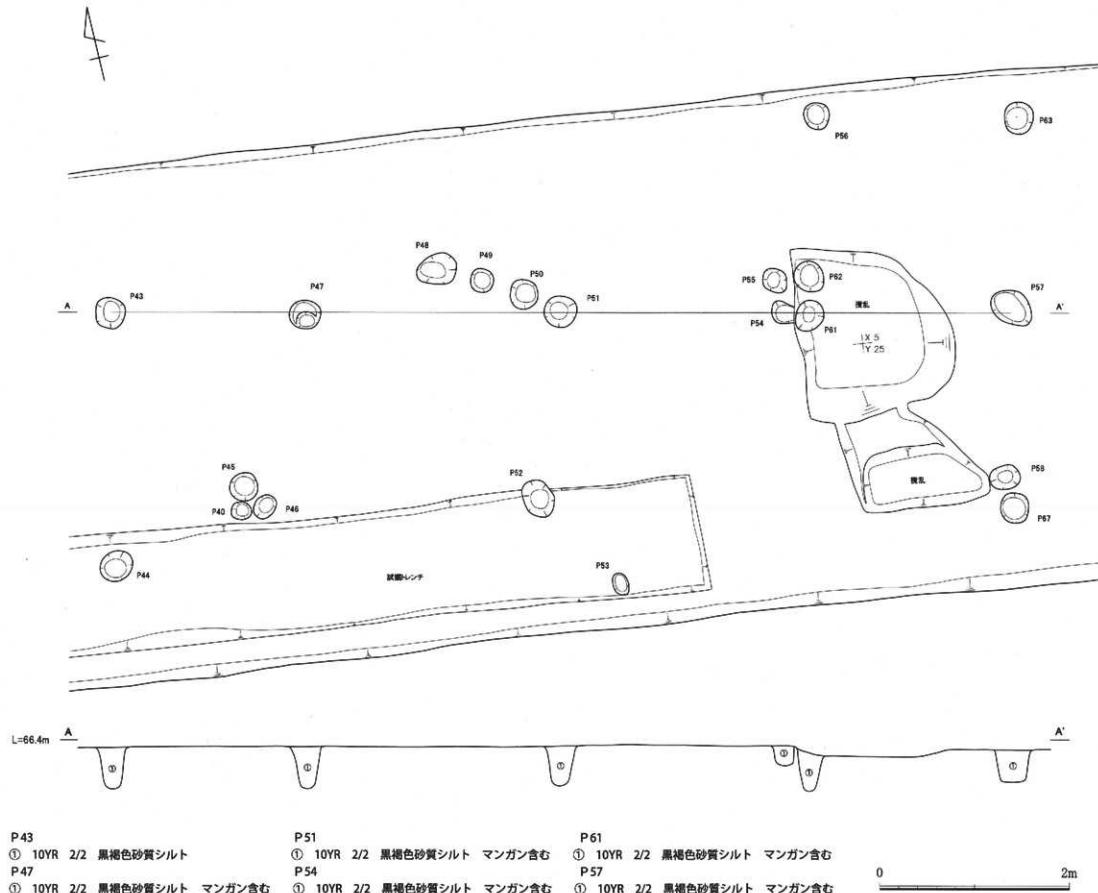


南壁土層断面図

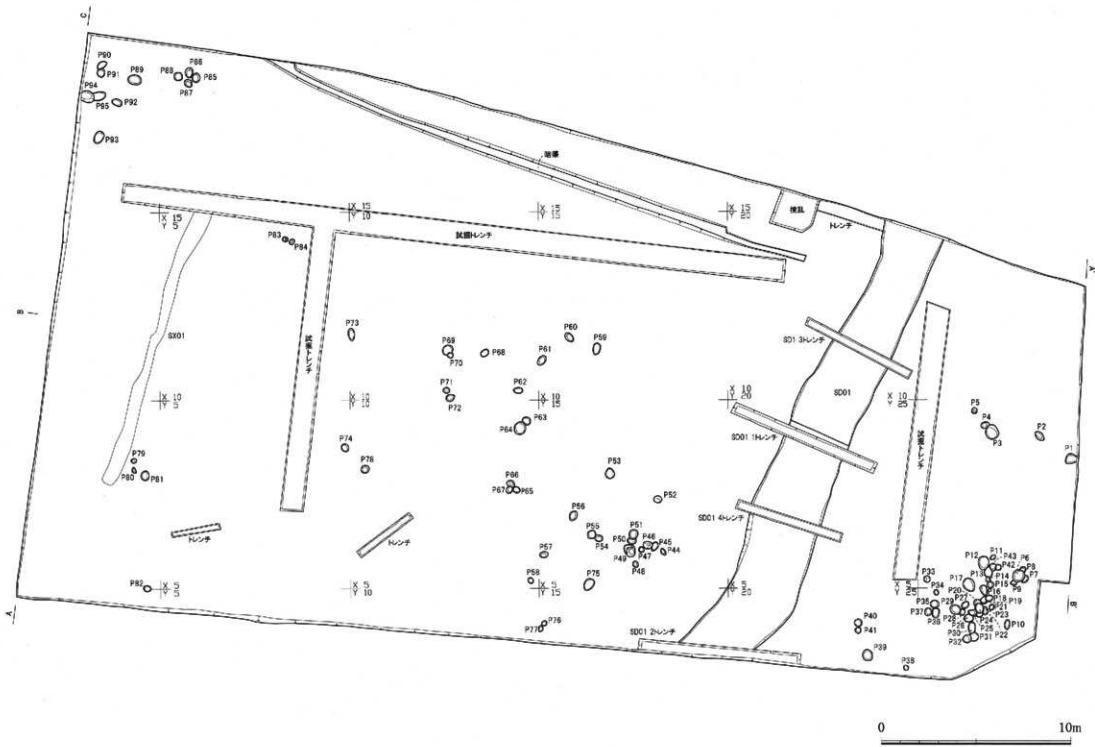


- | | | |
|-------------|-------------|----------------------|
| ① 10YR 4/2 | 灰黄色砂質シルト | 黄褐色粘土ブロック・1~2cmの小石含む |
| ② 2.5YR 4/2 | 暗灰黄色砂質シルト | 1~2cmの小石含む (水田の床土か) |
| ③ 7.5YR 2/2 | 黒褐色砂質シルト | (遺物包含層) |
| ④ 10YR 2/2 | 黒褐色砂質シルト | (P59埋土) |
| ⑤ 10YR 1/1 | 黒褐色砂質シルト | (P14埋土) |
| ⑥ 10YR 1/1 | 黒褐色砂質シルト | (P74埋土) |
| ⑦ 10YR 2/2 | 黒褐色砂質シルト | (P75埋土) |
| ⑧ 10YR 2/2 | 黒褐色砂質シルト | (P76埋土) |
| ⑨ 10YR 2/2 | 黒褐色砂質シルト | (P77埋土) |
| ⑩ 10YR 2/2 | 黒褐色砂質シルト | (P69埋土) |
| ⑪ 10YR 2/2 | 黒褐色砂質シルト | (P68埋土) |
| ⑫ 10YR 5/4 | にぶい黄褐色砂質シルト | (地山) |

第6図 6地区遺構平面図 (S = 1/200)・南壁土層断面図 (S = 1/100)

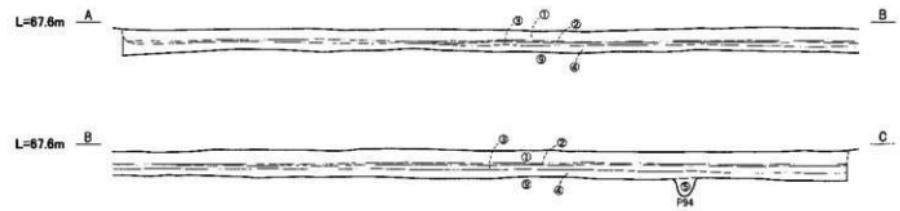


第7図 6地区柵状遺構平面図・断面図 (S = 1/40)

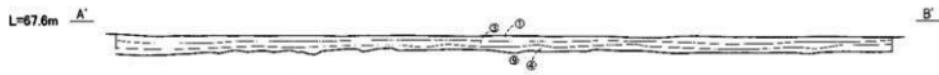


第8図 7地区遺構平面図 (S = 1/200)

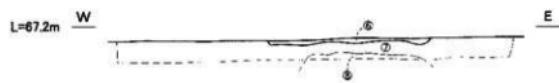
7地区西壁土層断面図



7地区東壁土層断面図



SD01 土層断面（1トレンチ）



SD01 土層断面（2トレンチ）

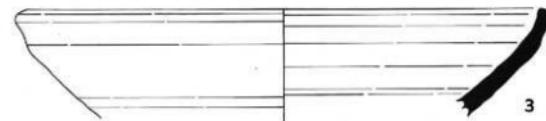


①		耕作土	
②	10YR 6/4	褐色砂質土	砂利含む（床土）
③	10YR 5/1	褐灰色砂質シルト	白色砂粒含む（旧表土）
④	10YR 2/2	黒褐色砂質シルト	マンガン含む（遺物包含層）
⑤	7.5YR 3/1	黒褐色砂質シルト	(P94埋土)
⑥	10YR 3/3	暗褐色砂質シルト	(SD01埋土)
⑦	7.5YR 4/2	褐灰色砂質シルト	マンガン多く含む（地山）
⑧	5B 5/1	青灰色砂質シルト	（地山の変色か）
⑨	10YR 5/4	にぶい黄褐色砂質シルト	（地山）

第9図 7地区西壁・東壁土層断面図・SD01土層断面図 (S = 1/100)

5地区

SD01(1~3)



P 1

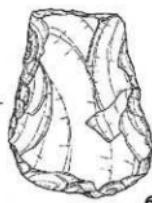
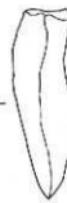


SD04 (4~5)



9

SD06 (6~8)

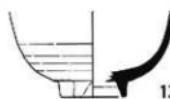
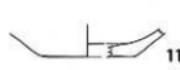
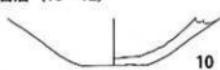


6



8

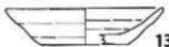
包含層 (10~12)



12

6地区

P44

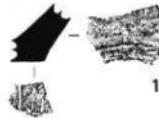


13

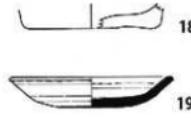
包含層 (14~21)



14



17



18



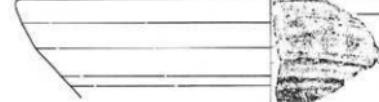
15



20



16



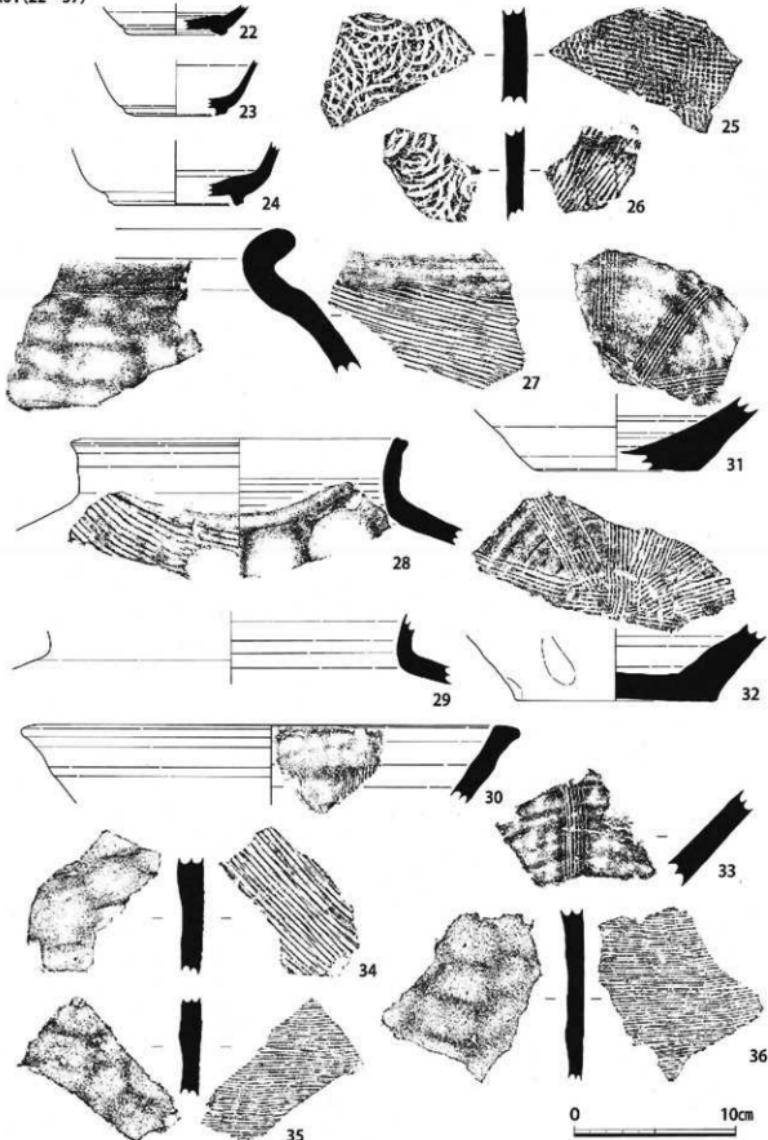
21

0

10cm

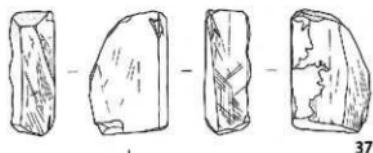
第10図 5・6地区 出土遺物 (S = 1/3)

SX01(22~37)



第11図 7地区 出土遺物(1) (S = 1/3)

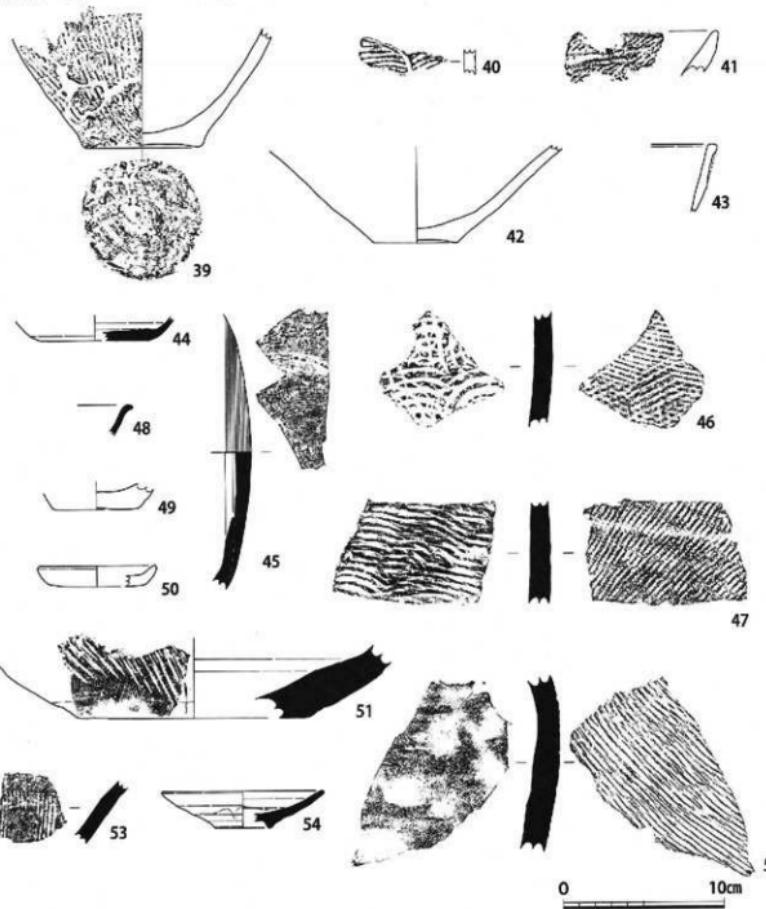
SX01



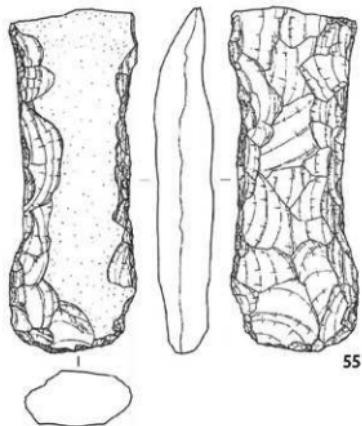
SD01



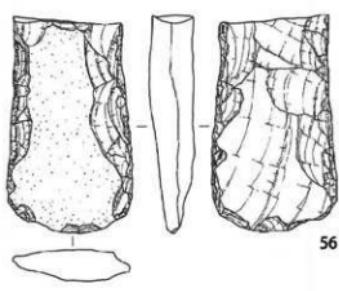
包含層 (39~59)



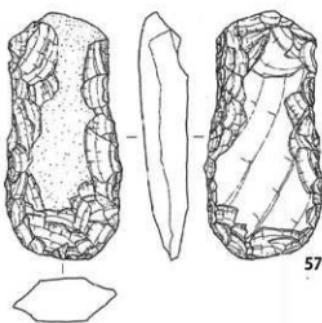
第12図 7地区 出土遺物(2) (S = 1 / 3)



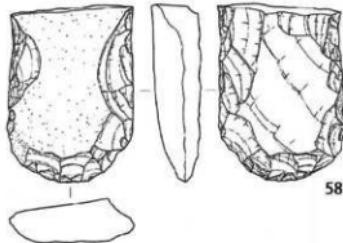
55



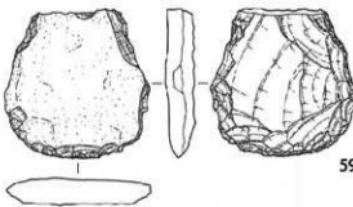
56



57



58

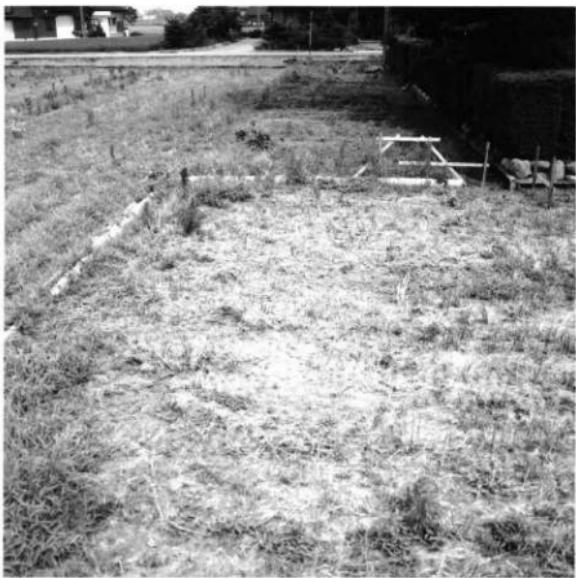


59

0 10cm

第13図 7地区 出土遺物(3) (S = 1 / 3)

写 真 図 版



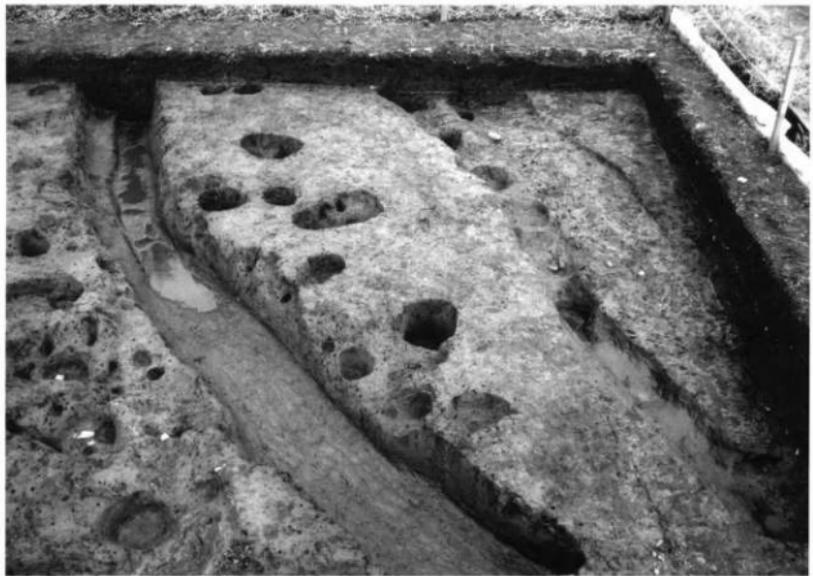
5地区 調査前風景（西から）



5地区 完成状況（西から）



5地区 完掘状況（北側上空から）



5地区 SD01・02・04完掘状況（北側上空から）



6地区 調査前風景（東から）



6地区 完成状況（東から）

写真図版 4



6地区 完掘状況（北側上空から）



6地区 ピット群完掘状況（東から）

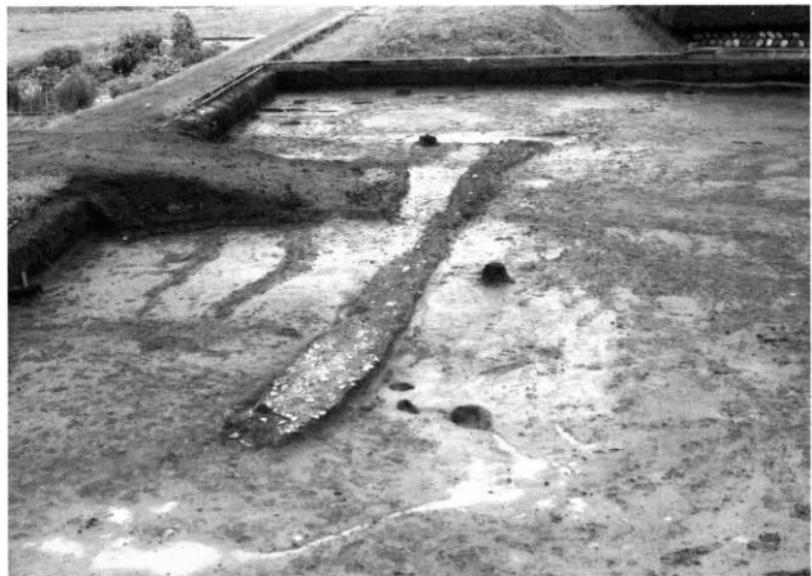


7地区 調査前風景（南東から）

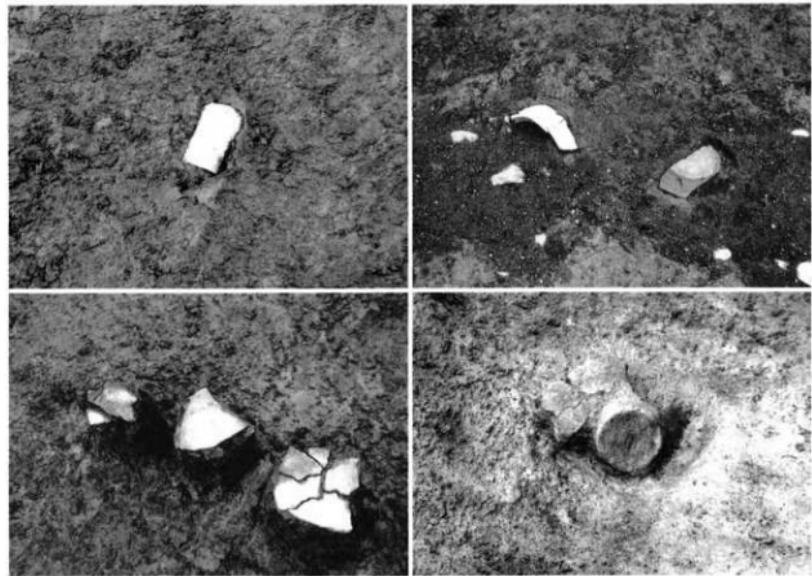


7地区 完掘状況（南側上空から）

写真図版 6

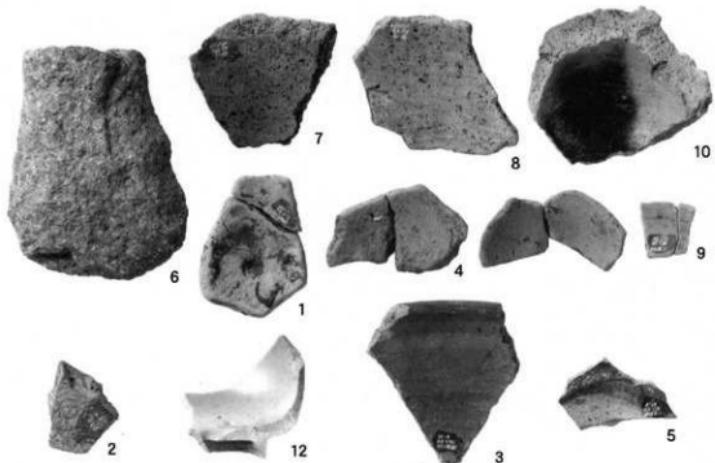
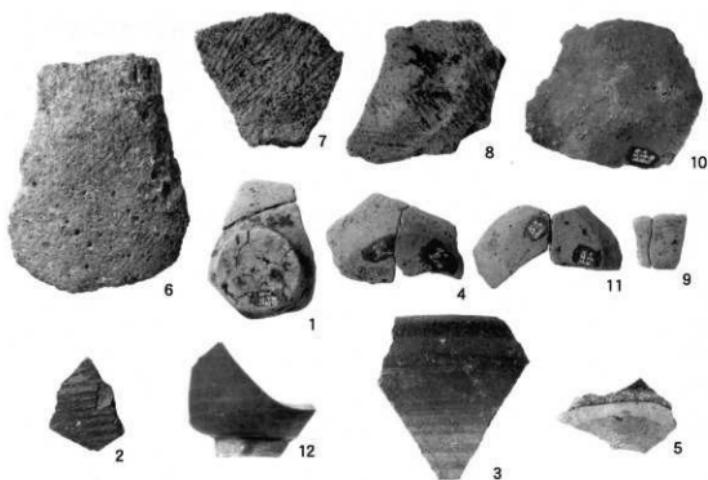


7地区 SX01検出状況（南から）



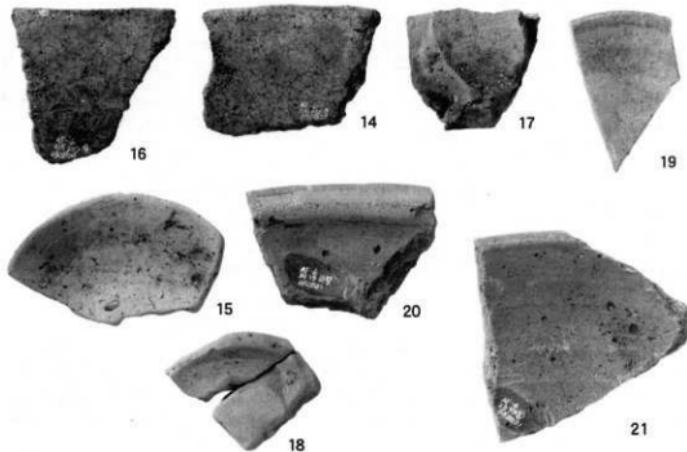
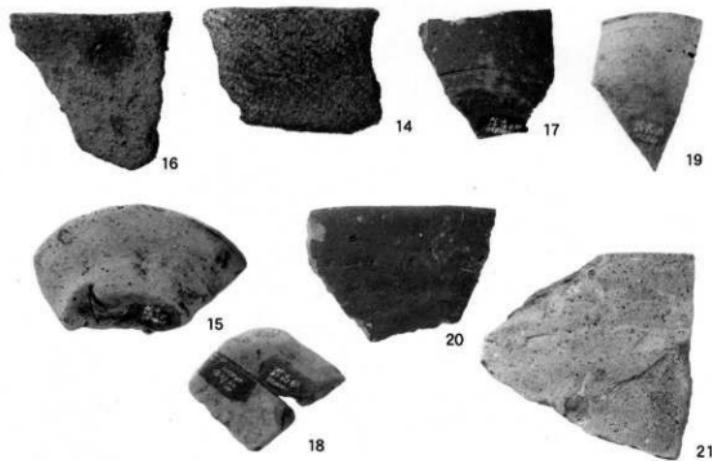
7地区 遺物出土状況

(左上：X9Y11付近 打製石斧・右上：X15Y9付近 珠洲
左下：X16Y8付近 土器・右下：X17Y14付近 織文土器)

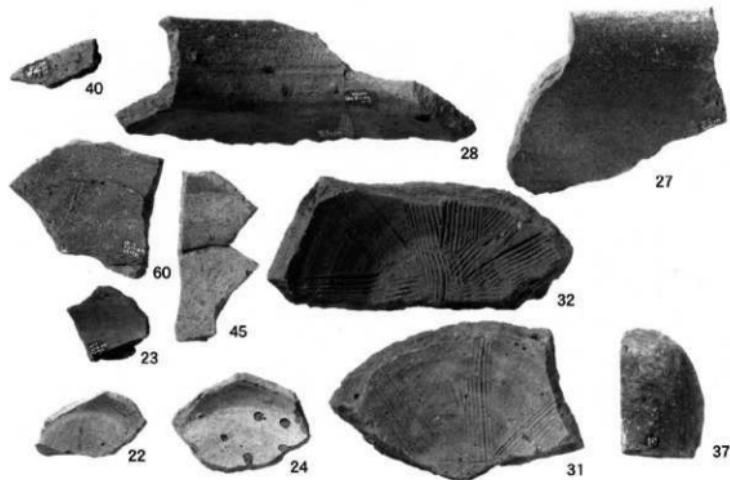
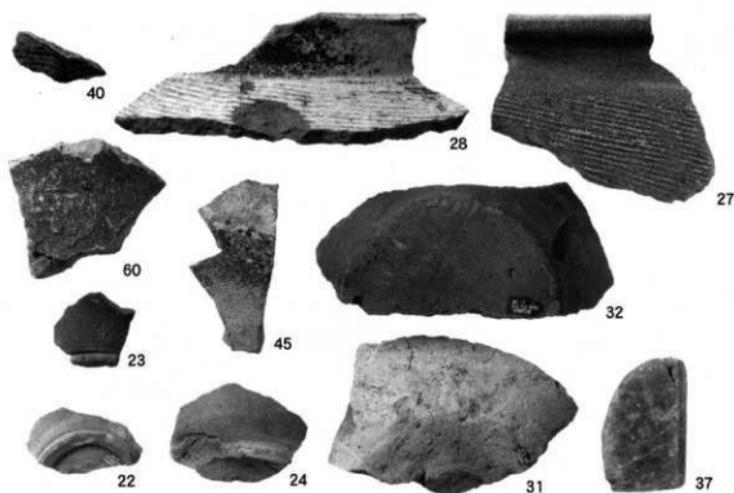


5地区 出土遺物

写真図版 8



6地区 出土遺物



7地区 出土遺物(1)



58



59



55



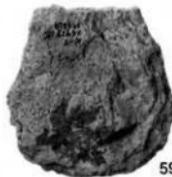
56



57



58



59



56



57



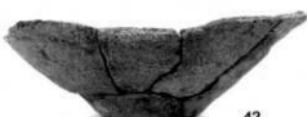
55



15



39



42

6・7地区 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とやまけんなんとし ありふさいせき よん						
書名	富山県南砺市在房遺跡 IV						
副書名	県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(7)						
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財発掘調査報告書 14						
編著者名	片田亜紀（南砺市教育委員会）・松田 繁（株式会社イビソク）・岡田有司（株式会社イビソク）						
編集機関	株式会社 イビソク						
発行機関	南砺市教育委員会						
所在地	〒932-0292 富山県南砺市井波520 TEL (0763) 23-2014						
発行年月日	西暦2006年2月28日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
在房遺跡	富山県南砺市	16210	452	36度33分 31秒	136度54分 45秒	20050615 ～ 20050901	1,910m ²	県営ほ場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
在房遺跡	集落・ 散布地	縄文時代 古代 中世	溝・土坑 溝・土坑・ピット 溝・土坑・ピット	縄文土器・打製石斧 土師器・須恵器・灰釉陶器 中世土師器・珠洲・輸入陶磁器				

県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査(7)

富山県南砺市 在房遺跡IV

平成18年2月

編集 株式会社 イビソク

発行 南砺市教育委員会

印刷 富士出版印刷株式会社

